

に従ひて昼と夜とを論はず共に驅せ使はれて網を引きて魚を捕る。白壁天皇の世の宝龜六年乙卯の夏六月の十六日に、天下に強き風吹き、暴き雨降る。潮に大水漲へて雑の木流出づ。万侶朝臣、驅使に遣りて、流木を取らしむ。長男と小男と二人、木を取りて椀を編み、同じき椀に乗り、拒み逆ひて往く。水はなはだ荒く急し。縄絶え椀解けて潮を過ぎ海に入る。二人おのおのの木を得て乗りて海に漂流る。二人知らずして、ただ「南無無量災難令解脱釈迦牟尼仏」と称誦へ、哭き叫びて息まず。其の小男は、五日を逕て其の日の夕の時に、淡路国南郡の田野浦の塩焼く人の住む処に僅に依り泊つ。長男馬養は、後に六日の寅卯時に、同じき処に依り泊つ。当の土の人等、見て来由を問ひ、状を知りて驚びて養ひ、当の国司に申す。国司聞き見て、悲び賑みて糧を給ふ。小男歎きて曰はく「生を殺す人に従ひて、苦を受くること量無し。我れまた還り来らば、彼れまた驅せ使ひてなほ生を殺す業を止めずあらむ」といひて、淡路国の国分寺に留り、其の寺の僧に従ふ。長男は二月を逕て、本の土に帰来る。妻子見て、面と目と瀏青になりて驚き怪びて言はく「海に入りて溺れて死に、七々日を逕て、齋食を為し、恩を報ゆること既に畢る。思はずより外に、何すれぞ活きて還来る。もしは是れ夢か、もしは是れ魂か」といふ。馬養

妻子に向ひて、具に先の事を陳ぶ。是に妻子聞きて、相悲び相喜ぶ。馬養心を發し世を厭ひ、山に入り法を修ふ。見聞く者、奇異びずといふこと無し。海の中に難多しといへども、命を全くして身を存つ。寔に釈迦如来の威徳にして、海の中に瀏ふ人の深き信なり。現報なほ是くの如し。いはむや、後生の報をや。

強ひて理にあらざして債を徴りて多く倍して取りて
現に悪しき死の報を得る 縁 第二十六

田中真人広虫女は、讃岐国美貴郡の大領外従六位上小屋県主宮手の妻なり。八の子を産生み、富みて貴く宝多し。馬と牛と奴と婢と稲と錢と田と畠と等有り。天年道の心無く、慳貪にして給与ふること無し。酒に多の水を加へ、沽りて多の直を取る。貸す日には小き升をもちて与へ、償す日には大なる升をもちて受く。出挙の時には小き斤を用、償し収むる時には大なる斤を以ちてす。息利を強ひて徴ること、太甚しく理にあらざ。或るは十倍に徴り、或るは百倍に徴る。債ふ人は耳を没くし、心を甘しとせず。多の人方愁へて家

一七七五年。
二この時の暴風雨に關しては、他に記録は伝えられていない。続紀によれば、六月は旱天のため祈雨。八月九日には暴風雨により伊勢、尾張、美濃に被害。十一月には暴風雨により日向、薩摩に被害。

三流れに逆らつて航行する。
四出发点であつた港まで激流におし返され、さらに海まで流された。
五無量の災難から解脱させてくれる釈迦牟尼仏に、南無いたします。諸注は、「南無、無量の災難を解脱せしめよ、釈迦牟尼仏」と称えた、と解する。しかし、いづれのばあいでも、「無知なので」このように称えた、とする説話展開には無理があろう。漂流する二人が「波」、あるいは「浪」「吹か」波が立つ、の意。万葉集・二十四卷には、波よ立つな、の意で「波な吹きそね」とみえるなどと呼ばれるのが「南無」釈迦と称えたことになった、という説話展開が本来のものではないだろうか。

六兵庫津名郡、洲本市。「田野浦」は未詳。七六日後。

八寅は午前三時から五時のころ。「卯」は午前五時から七時のころ。「寅卯時」は午前五時ころか。詳細な日時が記述されるのは、この二人の漂流が文書にされ、そこに詳細な記事が記載されてきたのであろう。

九原文「悲賑給糧」。官による食糧の施与は、賑給、賑恤、などと称された。

一〇殺生は、十惠のひとつ。
二兵庫三原郡三原町八木笑原国分に所在。

三下巻四縁。
四下巻三十八縁。

四下巻二十四縁。
五追善のおこない。上巻三十三縁。

六原文「不思の外」。政事要略所引高橋氏文に「不思(保佐佐流)外(爾)」とみえる。伴信友は高橋氏文について「この不字無用なり」としている。下巻四十二縁。

七上文によれば、六月十六日に流れ、六日後に漂流。「還る」二月がいつを起点としての叙述か不明ではあるが、妻子と再会した時は、後代に「彼岸」と称された時期にあたるか。「日本曆日原典」によればこの年の秋分は八月十九日。若し是れとされるのは、この時期に死者の靈魂が帰還する、とされていたことを示すか。下巻三十二縁。

八このことを記した文書にかかわるか。
九来世での報。「後生」と「現報」とを對比させる例に、下巻三十縁がある。

第二十六縁 悪業についての現報説話。
一未詳。本説話以外に所伝をみない。
二香川県木田郡あたり。
三未詳。本説話以外に所伝をみない。

一七七六年。讃岐国では、七七二年六月に疫病、七七四年三月に飢饉、七七五年二月に飢饉、七七七年二月に飢饉(続紀)。

ニちよど四十九日にあたるのは何か意味があるのか。

三 広虫女はことばを発することができない姿に變ずるので、ことばを発することができなくなつてから言うべきことを事前に示す場として、夢が述べられる。

四 たといは四分律行事鈔・中ノ一、善惡因果経などにみえる。

五 「復飲酒者、加益水等、而取酒餠、如是是賣、有偷盜過」(正法念処經・八。放証)。「今身如 waters 酒中、沽汁者、死作水中虫、又生人間、水腫斷氣而死(善惡因果経)など」とみえる。

六 ↓下巻二十一縁。

七 七日間は広虫女の死骸を焼かずに置いていたのだが、その七日の夕方に広虫女は蘇生した。下文の「其日夕の」(其を重視するならば、これ以外の縁は考えにくい)。

八 雜師と優婆塞とを三十二人あつめて九日間の修福の仏事をおこなっていた。説明の文が挿入されているのである。「九日之頃」とあるのは、夫と八人の子との合計九人の遺族が記述されていることとかわかるか。三十二人という数字が何を意味するのかは不明。

九 ↓上巻十縁。二〇 中巻十六縁。

縁、三十二縁。二一 中巻十六縁。

一 原文五体投地。懺悔するばあいにもおこなわれた。↓下巻六縁。

三 ↓下巻二十四縁。(三 未詳。

四 なぜこの東大寺への奇進が述べられるのかは、あきらかでない。当時、讃岐国には東大寺の封戸が百五十戸存した。

五 上文中に富貴宝多、有馬牛奴婢稻錢田畠等」とみえる。

六 本説話は、この解にもとづくのであらう。

髑髏の目の穴に筭の擲すを脱ちて祈りて霊しき表を
 示す縁 第二十七
 白壁天皇の世の宝龜九年戊午の冬十二月の下旬に、備後国葦
 田郡大山里の人品牧人、正月の物を買はむが為に、同じき国深津郡に深津
 市に向きて往く。中路に日晩れて、葦田郡に葦田竹原に次る。宿れる処に呻ふ
 音有りて言はく「痛、目」といふ。牧人聞きて竟夜寝ずして踞る。明日に見

第二十七縁 あやしき表(い)の説話。

元禄八年
三広島県品^(あ)郷、福山市、府中市あたり「大山里」は未詳

三未詳。本説話以外に所伝をみない。

三土佐日記によれば、屠蘇^(そと)、白散^(びやくさん)以上、薬酒、芋^(いも)茎、荒布^(あらふ)、歯固^(はこ)、押鮎^(おしあひ)以上、食物、鰯^(いわし)の頭・柁^(か)の付いた注連繩^(ぬまりなひ)。延喜式・内膳司には、「正月三節」として、米、糯米^(ちねりこめ)、糯稻^(もちいね)、脱穀^(だくかく)していないもの、糯糊^(もちこう)、粟子糊^(あわびのこ)小麦、荳子^(まめ)、胡麻子^(ごまし)、大豆、小豆、清東鯿^(あまびり)、隠岐鯿^(あきのう)、煮堅魚^(にきんぎょ)一種、螺^(かい)貝^(がい)、紫菜^(むらさき)、海苔^(のり)、干薑^(かんしょう)・乾燥した生薑^(せいしょう)、干菓子^(かんかし)、搗栗子^(うちくり)、生栗子^(なまくり)干柿^(かんし)、椎子^(しい)、菱子^(やなぎ)、橘子^(たちばな)、榨

東大寺への寄進の内容の記述が詳細なのは、その解の記述の反映であらう。

七寺への寄進によつて広史女の生前の罪は贖われたのである。この「死」は、より高い地位の存在への転生を暗示する。

八 成実論六業品の取意か。―中卷三十二縁。

第二十七縁 あやしき表(い)の説話。

元七七八年。

三 広島県(品)郡、福山市、府中市あたり

「大山里」未詳。

三 未詳。本説話以外に所伝をみない。

三 土佐日記によれば、荒布(あらふ)、麤鮓(こさ)、麤因(こい)、押鮓(おし)以上、食物、鰯(いわし)の頭・柀(おひ)の付いた注連繩(しづな)延喜式・内膳司には、「正月三節」として、米、糯糯米(ぬいぬい)、糯稻(ぬいぬい)、脱穀(だつこく)しないもの、糯麴(ぬいも)、粟子糯(いも)、小麦(こむぎ)、荳子(まめ)、胡麻子(ごま)、大豆(まめ)、小豆(あずき)、清酒(きよさけ)、酢(す)、油(あぶら)、醬(かじ)、調味料(たみりょう)の一種、塩東鯨(あづき)、隱岐海鮓(おきかい)、煮鯨魚(にぎぎ)、螺(かき)、卷貝(まき)、紫菜(むすめ)、海苔(のり)、干薑(かんしょう)、乾燥した生薑(かんしょう)、干菓子(かんし)、搗菓子(うめ)、生菓子(なま)、干柿(かんし)、推子(おし)、菱子(ひし)、橘子(たち)、樺(か)、枝のついたもの、掬橘子(くし)、微小菓(こ)、かみえ 元日より三日までに供するものとして、蘿蔔(かぶ)、ダイコン、味噌漬(みそ)、糟漬(そう)、煮塩鮓(に)、鹿あし(か)、鹿の肉、猪(いの)、猪の肉、煮塩鮓(に)がみえる。

三 福山市あたり。原文「向」同国深津郡に「深津市」未詳。原文「次」葦田郡に「葦田竹原」。

三 ああ、目。「秋風のふたたびごとにあなめあなめ」(神宮文庫本小町巻六)。